

## 檸檬と帽子

大塚喜子

小春日和の昼下がり、デパート（銀座・三越）屋上のベンチで、吉田ひろ子は来月の読書会課題図書「檸檬（梶井基次郎著）」のページを捲っていた。見開きのポートレートの中で、着流しの梶井基次郎が畏まっている。何と醜男な……と思いつつ、目を上げると、前方で談笑している四人の男性の中に梶井基次郎に似た顔の男が……ひろ子の目は点になった。大矢君……声を掛けそうになった。都立高校で生徒会の委員を格好良くこなして人気者だった大矢君ではないか。戸井田建設に就職したと聞いている。あの年（平成四年）東京大学に進学したのは二人。彼はその一人だった。

ひろ子は身を隠そうとして、隣のベンチに移って大矢君の様子を上目遣いに伺った。

エラの張った堂々とした顔立ちには、彼に間違いない。上等仕立てのスーツ姿に威厳がある。気安く（大矢君？）と声をかけられない。本を閉じてエレベーター・フロアーに向かうと、背後から

「吉田ちゃん？吉田ちゃんじゃないか……」

聞こえたのは紛れもなく大矢太郎の声だった。思わず全身が硬直した。生徒会で雄弁をふるっていた時と同じ声ではないか。逃げ出したいが、逃げ出せない。ひろ子は強張った笑顔で、さも驚いたふうを装った。太郎はそんなひろ子に頓着しないで再会を喜んでいる。連れの紳士は離れたところで我々に背を向けた。

「六時に……正面玄関のライオン像の前で待っているよ……これから京橋の本社に戻らなければならない」強引な言い方も当時のままで変っていない。大矢君は連れの二人と談笑しながらエレベーターの中に消えた。

太郎は約束の六時より少し前に現れると、タクシーで初台駅近くの高齢夫婦が切り盛りするこじんまりした店に案内してくれた。

「何年ぶりだろうね、くつきりした二重瞼で吉田ちゃんだとすぐにわかったよ」三十年前に亡くなった父は彫の深い端正な顔立ちで、父親似といわれる目はひろ子の自慢である。

三つあるテーブル席は満席で、鉤型のカウンターの端に太郎は当然のように

座った。予め予約したのかもしれない。出雲切子のぐい飲みに、出雲の酒『玉鋼』が出された。「松江は僕の初任地だ」得意そうに言った。

親父さんの手元が見える。今日のお勧めはホタテらしい。料理が並ぶまで時間がかかりそうな雰囲気である。

「クラス会に出てこないね。誰とも連絡取り合っていないの？みんな気にしていたよ。どうしているだろうって。学生結婚して公務員になったと聞いたけど？」ひろ子の近況を知りたがって矢継ぎ早に質問を浴びせてきたが、ひろ子はそのほとんどに答えたくなかった。ありがたいことに太郎は深追いしてこなかった。それは、生徒会の委員で格好良かったあの頃の印象と何ら変わらない。

ひろ子にとって、クラス会は関係ない。小学校から大学まで全てのクラス会や同窓会に縁がないと思っている。

母は娘が大学卒業前に結婚したことが気に入らなかった。夫に碌な係累がないと言って嫌った。夫の卒業大学も就職先も何もかもが気に入らなかった。義母の執拗な暴言に傷ついた夫は、結局妻の元を去った。ひろ子が必死に引き留めたが無駄だった。

娘の結婚を破綻させて、責任を感じる殊勲な気持ちなど、母に微塵もない。（親を捨てる娘ではない）と見越しているのだ。七年間の結婚生活だった。

ひろ子は母に愛された記憶や、母をいとおしむ気持ちのすべてを帳消しにした。

「それで……クラス会は盛会だったの？」

「みんな忙しそうで、去年の出席者は六人。男は僕だけだった。ゼネコンは暇そうね！なんて言われちゃったよ」先客がご馳走さまと言って席を立った。

おかみさんが壁に指でなぞって計算した金額を客が支払って、おかみさんがそれをエプロンのポケットにねじ込んだ。

そろばんも電卓も鉛筆さえも使わず計算して、領収書もレシートも出さないなんて、白黒の映画を見ているようだった。

厨房のどこからか、微かに音が流れている。料理が並んで、湯気の中に三つ葉が香って、とじた卵の中からホタテがこぼれた。二人は黙々と箸を運んだ。

太郎が『玉鋼』をもう一本注文すると、聞こえていた微かな音がすべて止んで、しっかりとした音が聞こえてきた。

「第二楽章だよ」太郎がひろ子の耳元で囁いた。え？聞き返すと、

「ピアノ・コンチェルトの第二楽章だよ。えーとケツヘル？」親父さんがすかさず、でも遠慮がちに「ヨンロクナナ」と言うと太郎が頷いた。二人は互いに目で笑いあっていた。

我々の勘定もおかみさんが壁に指で計算した。

「何十年も、ああやって計算している。ぼくが入社した頃は八重洲の本社の地下で営業していた。僕とは長い付き合いサ」と言うと太郎は唐突に

「吉田ちゃんの旦那さんは元気なの？」一瞬、間をおいたが

「お陰様で」とこたえた。

太郎はひろ子が離婚していることを知っているかもしれない。聞く方も答える方も互いに知らぬふりをしているのかもしれない。

帰宅すると玄関に靴が、リビングや廊下に服やアクセサリが散乱して、母はいなかった。十時を過ぎて窓の外に稲妻が走ると、テレビ画面がテロップで大暴警報を流した。母は芝居を観に行くと言っていたから、この雨で近くのホテルに避難しているだろう。

午前三時過ぎ、電話のベルが鳴った。警察からだった。駆けつけた救急病院の裏口の外灯の前で、ひろ子は数秒立ち止まった。

（もしかしたらこれで楽になれるかもしれない。母から逃れられるかもしれない）と思った。（バイクに跳ねられて、集中治療室にいる）と聞かされた時にそう思った。人には言えない本心を封印して、ひろ子は深夜の廊下を歩いた。

母は身体のうちこちを管で繋がれ、傍らの計器の画面が不規則に動いている。医師の説明から、母の状態はかなり危険なことは明らかだ。会わせたい人がいれば呼ぶようにと言われた。会わせたい人は思い浮かばなかった。

スリップした若者のバイクにぶつかっての事故だった。母が若者の人生に傷を遺したのだ。若者とその親の悲嘆を思っ、ひろ子は三人の前で心を込めて謝った。土下座したいくらいだった。若者は悪いのは僕ですと言って、ひろ子の手を取った。ひろ子は（悪いのは決してあなたではない）と心の中で叫んだ。

一夜明けると雨は上がった。母は恐ろしいほどの生命力で危機を切り抜けた。何という運の持ち主だろう。医者の驚嘆からそれは明らかだった。この分なら意外に早く退院できますよ。後遺症も遺らないのではないか。医者は嬉しそうに、得意気に言った。仕方なくひろ子は医師と看護師に頭を下げた。母は死なずに済んだのだ。母が死ぬはずはないのだ。ごく自然にそう思った。

昼過ぎに、ひろ子はやっとのことで家に帰りつき、畳にへたり込んだ。母が

脱ぎ捨てた衣装を見ると、吐き気がした。やおら立ち上がると黒いビニールのゴミ袋に、母の衣装やアクセサリを次々押し込めた。唇をかみしめてグイグイ押し込めた。ゴミ袋の口に唾を吐き捨てた。泣きながら、吐き捨てた。ひろ子は泣きながら寝てしまった。

目が覚めて洗面所の鏡を見ると、父親譲りの自慢の目元が、母親そっくりの目元が変わっていた。

太郎から鎌倉へ誘われて、二人は久里浜行き一番線ホームの先端で待ち合わせた。

今日の太郎はあか抜けていない。ジャケットとジーンズの組み合わせがチグハグダで、借り物みたいな円錐形の帽子に、ひろ子は思わず吹き出しそうになった。

二年前に銀座で出会った時の威厳がない。ひろ子は彼に背を向けて、そっとイヤリングを外した。

「おはよう」「お待たせしました」短い挨拶を交わして、入線してきた電車に乗り込んだ。暫く互いに黙ったままだったが、三つ四つ駅を過ぎたところ

「今日は無理させちゃったかな？」窓の外を見たま太郎は呟いた。

横浜駅を過ぎて、車内が空いてくると太郎は上着を脱いで、ひろ子の隣に腰かけた。陽に焼けた逞しい太郎の腕をみながら、細い夫の腕を思いだした。

離婚したことは話していない。母親のことも、隠すつもりはないが、話さない。車内放送が鎌倉到着を告げた。降りる人は疎らだった。

夏の余韻を残した由比ヶ浜沿いの道を、車がスピードを上げて行きかっている。太郎はあみだにかぶった帽子で不器用に日差しを避けながら

「何処へ行くこうか？美味しいものを食いたいね」

「歩き出したばかりじゃない」

「ひろ子さんと二人で飯を食いたい。男って単純なんだ」

(吉田ちゃん)じゃなくて始めて(ひろ子さん)と呼ばれた。面映ゆい気がした。

「君、変わったね」

「どんなふうにな？」

「どんなふうって？高校の頃からさ」遠くの海でヨットの帆が時折銀色の鋭い光を放している。交差点にさしかかった。

「三十五年も昔じゃない。変わるわよ」日傘を開きながら太郎を見上げた

「やっぱり変わったよ。高校の時はおしゃべりで、おきやんだったじゃないか」  
「相手によりけりヨ。大切な人と話すときは余計なおしゃべりはしないと決めているの」

「僕は君にとって大切な人だと思ってもいいかな」信号が青になって会話は途切れた。

住宅地に入ると、どの家も庭木の手入れが行き届いている。母から植木屋に連絡するようにと言われているのを思い出した。母を思い出したことに苛立って、足元の小石を小さく蹴った。と太郎が足を止め、ひろ子の手を握った。握り返すと、太郎の手に力が加わった。

向かい側からゆっくり歩いてくる銀髪の二人ずれとすれ違った。眩しいほどの老夫婦だと思った。(ヨンロクナナ)の親父さん夫婦を思いだした。住宅街を離れて、由比ヶ浜に出ると、何方からともなく繋いでいた手を放した。

「ここからバスに乗る？もう少し歩く？」

「極楽寺あたりまで歩いてみましょうよ」

話が決まると太郎は鎌倉彫や陶磁器、骨董品などの老舗が並んでいる歩道を先に立って歩き出した。ひろ子は時折足を止めてウインドーを覗き込むと、太郎はそれに興味がないらしくて、ひろ子が歩き出すのを道の端で待っていた。少しも急がせる風はなく、おっとり立って待っていてくれるから、安心してウインドー越しに鑑賞を楽しんだ。

夫はせっかちだった。いつも早く！早く！とひろ子を急き立てた。急き立てられはしたが、ひろ子は自分流のやり方で行動した。夫はそれを咎める事はなかった。

母は何時も自分勝手にせっかちだ。ひろ子は夫のせっかちはちっとも嫌ではなかったが、母のせっかちは嫌いだった。せっかちが嫌いなのではなくて、母が嫌いなのだろう。

五差路で立ち止まると、こっちの方に文学館があるらしいと言いながら、緩やかにカーブする坂を登り始めた。

館内に人の気配はほとんどなかった。二人は川端康成が宇野千代に宛てた葉書きに見入った。「梶井の代表作が【檸檬】だと言われるのは残念だ。彼の最もすぐれた作品は【城のある町にて】である……」と川端の癖のある字で書かれていた。太郎は

「銀座で再会した時、君は手に（梶井基次郎）の文庫を持っていたね。懐かしかったよ。高校の入試で（檸檬）の冒頭が出題されたのを覚えている？僕は覚

えているよ。」と言った。太郎はこの作家に殊の外、関心があるらしい。ひろ子は邪魔にならないように一人、ベランダに出て海を見下ろす石段に腰を下ろして、霞む水平線を眺めた。

こんな平和な心地よさは何時の頃以来だろうか、思いだそうとしたが思いだせなかった。

文学館を出て、坂を降りきると太郎は忙しく辺りを見回した。

「何を探しているの」

「美味しいもの食べたいと思ってサ」ひろ子が蕎麦屋の看板を見て太郎を促した。

蕎麦が出てくるまでかなり時間がかかりそうな気配である。

夫ならこんな時、何度も何度も厨房に目を走らせるのだろう。母なら店員を呼びつけ、まだか、まだかと急かせるだろう。太郎と一緒にいながら又しても、母と夫が顔を出して、ひろ子を鬱々とさせる。

空になったビールのグラスを置くと、太郎は唐突に自分の事を話し出した。

「会社を辞めた。家内に相談しないで勝手に辞表だしたのが拙かった。謝って、話し合った……が色々あって。結局離婚した」

思いもかけないことを聞かされて、ひろ子は言葉を探した。

「遮二無二働すぎたのかもしれない。僕は建築しか知らない。現場しか知らない。現場が好きだ。二年間新規受注の現場から外されて営繕工事に廻っていた……」と言いながら 太郎は脇に置いた円錐形の帽子を捻った。捻られた帽子が悲鳴を上げたかに見えた。ひろ子は言葉が見つからなかった。

会社に辞表を出した挙句に、離婚したのだという。近頃は珍しくない話かもしれないが余りにも唐突だった。

「ところで……学生結婚したひろ子さんの旦那さんは元気なの？家族は？」この問いかけも唐突だった。咄嗟に「お陰様で」というと、蕎麦が運ばれてきた。

「出雲蕎麦だね！」太郎が嬉しそうにいい、それ以上はひろ子の家庭の事を聞かないでくれた。

「戸井田建設を退職して、今は何しているの？」

「今は自由人サ、ちよっと一休みしている。しばらくしたら、またゼネコンで働くよ」太郎の語調に明るさが戻り、張り詰めていた空気が和んだ。

「ああ美味かった。鎌倉で出雲蕎麦を食べるなんて……僕の始めての現場は松江の堀川沿いの大型総合ビルだった」如何にも懐かしそうに、然も得意げに言っ立ち上がった。さっき捻った帽子を置き忘れていた。ひろ子は皺を伸ばし



